

対談

国際教養大学が 既存の大学に突きつけた課題

中嶋嶺雄

国際教養大学理事長・学長

潮木守一

名古屋大学名誉教授

就職率一〇〇%を
目指したわけではない

潮木 秋田の地に国際教養大学が生まれたのが二〇〇四年。私も学部や大学院を新設するために汗を流したことがありますが、開学から一〇年足らずで、入試難易度も全国屈指、就職率一〇〇%達成という成果はなかなか実現できない。学生にとって、企業にとって、何がいちばんア

トラクティブなのでしょう。開学以来学長を務める中嶋先生の個性や魅力はもちろんです。それだけでは学生は集まりませんし、企業は注目しません。中嶋 僕がいつも言うのは、大学は就職のためにあるのではないということです。就職率一〇〇%を目指して、やってきたわけではありません。国際教養大学がすべての授業を英語でやり、一年生は全寮制で外国人留学生とルームシェアをし、一年間の留学の義務が

ある。これらはすべて、名前の通り、国際教養を身につけるためです。特に、留学は学生を鍛えます。学生たちは、その器を大きくして帰ってきます。それが就職につながったと考えています。おっしゃるように新しいことを始める苦労がなかったとは言いません。でも、新しい大学だからこそ達成できた面もたくさんあります。悪しき伝統の残る大学ではなかなかできないことを、原則を枉げずに貫くことができた。そ



うしおぎもりかず 1934年神奈川県生まれ。東京大学教育学部卒業。名古屋大学教育学部教授、同大学大学院国際開発研究科教授、桜美林大学大学院国際学研究科教授などを歴任。著書に『京都帝国大学の挑戦』『ドイツの大学』『アメリカの大学』『ドイツ近代科学を支えた官僚』『世界の大学危機』『大学再生への具体像』『職業としての大学教授』など。



なかじまみねお 1936年長野県生まれ。東京外国語大学外国語学部中国科卒業。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。社会学博士。東京外国語大学教授、同大学学長を経て、2004年より現職。著書に『中ソ対立と現代』『北京烈烈』（サントリー学芸賞）、『国際関係論』『なぜ、国際教養大学で人材は育つのか』『学歴革命 秋田発 国際教養大学の挑戦』など。

れが、学生にも世の中にもアピールしたのだと思います。国際教養大学の前は僕は東京外国語大学で学長をしていましたが、その時は教授会というものに、さんざん苦労させられました（笑）。英語教育を改革しようという議論を重ねた時も、結局何一つ決めることができなかった。潮木 よくわかります。教授会というものは、なぜあも足を引っ張る存在なのか。（笑）

中嶋 教授会自治や大学自治自体が問われている時代であるにもかかわらず、それらの改革に向かおうとしないのが、国立大学の大きな問題点です。既得権、人事の党派性、仲間意識、学閥……。これらが事態をいつでも紛糾させる。国際教養大学では、教授会は三〇分程度済ませることにして、細かいことは教育研究会議と経営会議で決めます。教授会を大学経営から切り離したのです。人事権も最終的には学長にあります。潮木 人事は国際公募されていますね。

中嶋 ええ。世界各国からすごい競争率で集まります。応募者は私が必ず面接をしてから、模擬授業をしてもらう。経歴の上で、あるいは研究者としてどんなに素晴らしくても、十八、十九歳の若者に教養科目を教えられる人材かどうかのほうが大事です。それは模擬授業をしてもらえばすぐにわかります。潮木 なるほど。教員の採用においても、画期的です。

中嶋 国際教養大学が日本の多くの大学と大きく違っているのは、学生が文系なら法学部政治学科、理系なら工学部機械工学科といった学部学科に入るのはなく、国際教養大学そのものに入る点です。専門は二年次から三年次になる時にゆるやかに決めますが、あくまで教養教育の一環としての専門という位置づけです。僕は、十八歳か十九歳で、偏差値や予備校の指導、親や教師の意向によって一生を決めてしまふのは間違いだと思っています。国際教養大学や国際基督教大学（ICU）を除

くと、大学生生活の初めから、いわば「小部屋」に入れてしまふ。教養教育という点から見ると、間違いです。

さらに、二〇〇八年からはギャップイヤー制度を導入しています。十一月に入試をして、翌年九月入学。三月までは高校生ですが、四月から九月までをどう過ごすか、合格者には計画書を提出させています。ボランティアに励んだり、世界を旅行したり。先日、ガーナへ行ってきた学生——といってはまだ入学前——が、どうしても学長に報告したいとやってきました。東大がギャップタームの導入を提唱していますが、タームでは中途半端です。

卒業した後についても、おかげさまで就職率がいいこともあり、学生に余裕があるようです。本当を言えば、就職活動は大学を卒業してから始めてほしい。人生の選択は二十代の終わりから三十代の初めでいい。それまでは、いろいろなことを体験すべきです。潮木 そういう考え方が大切ですね。

若いうちは迷ったりして、社会に出るのが一年か二年延びたって構いやしない。ただ、企業が横並びで新卒採用主義をとっているかぎり、そこがなかなか難しい。

中嶋 新卒採用主義はだいぶ崩れてきましたが、完全ではありませんね。アメリカなんかだと、大学に社会人がたくさんいて、年配者と若者が一緒に学んでいます。そういう場面のない社会はひ弱だと思っています。人生の厚みは、大学生の時期をどう過ごすかによって違ってくると思います。

異文化体験の必要性

潮木 先ほど、留学が学生を鍛えるとおっしゃいましたが、海外での体験は学生にとって非常に大きいことは私も体験しました。九〇年代初め、名古屋大学大学院に国際開発研究科を立ち上げた時に、学生を連れて何度か海外へフィールドワークに行きました。国際開発がテーマですから、名古屋で本だ

け読んでいても仕方ない。

中嶋 名古屋大学の国際開発研究科には私も何度か呼んでいただき、講義をしたり、シンポジウムに出たりしました。他に例を見ない研究科で、非常に注目されました。

潮木 ただ、国立大学ですから、海外へ学生を連れていくための費用が問題になる。文部省（当時）は学生の「修学旅行」に国民の税金を使うわけにいかないと認めてくれない。結局、地元の財界にお金を出してもらい、どうにか行くことができました。学生にとって、聞くことと見ることは大違い。教室の中ではなくて、いざ得られない体験ですね。国際教養大学の留学は三年次ですか？中嶋 二年次、あるいは三年次になります。というのは、留学するには、TOEFLのスコア五五〇点をクリアしなければならぬからです。それくらいの実力がないと、海外の大学で授業を理解することはできません。国際教養大学の場合、一年分の単位を提携校

で取得するので、かなりの英語力が必要です。たとえば五四七点で、足りないのがたったの三点であったとしても、留学を許しません。セメスター制（春学期と秋学期）ですから、半年待って、その間に勉強すればよいのです。

潮木 留学先は学生が個々に見つけるのですか？

中嶋 いいえ。提携校が一四〇ほどあり、その中から学生に志望校を出させて、後は成績などで決めます。提携校とは授業料相互免除の取り決めを交わします。この交渉はかなりタフで、僕自身が先方へ行って学長なり担当者なりと談判することもあります。

授業料相互免除のいちばんの難点は、各国で授業料がかなり違うことです。国際教養大学は、二〇一二年度から国公立大学で初めて授業料を三割値上げして、年間約六九万円にしました。普通の国公立大学は四六万円ですから高いのですが、それでも私立大学の半分程度です。それに比べて、たとえば提

携校の一つカリフォルニア大学デヴィス校は、この円高でも二八八万円になります。先方としては学生一人につき二八八万円取れるところ、国際教養大学から無料で一人受け入れなければならぬ。それでは赤字になりますから、うちからは一人送るけれど、先方からは三人受け入れることにして、バランズをとります。キャンパスの中につねに外国人留学生が四分の一はいて、こちらの学生の四分の一は外国へ行っている。その状態を作り出すのはなかなか大変です。でも、留学した学生たちは三〇単位前後をきちんと取得してきますから、苦労も報われます。

潮木 同じ大学の中に異文化があるという状況は貴重ですね。名古屋大学の国際開発研究科の時は、研究科の性格もあり、学生の国籍が多様でした。開校当初は、定員の三分の一は新卒者、三分の一は社会人——大部分は海外青年協力隊の経験者、そして残りの三分の一が外国人でした。ところが次第に

外国人が増え、数年後には三分の二が外国人になりました。国が違えば、国際的な事件の見方一つも変わってきて、ディスカッションに厚みが出る。何度も、政治家に聞かせてやりたいと思っただけです。

中嶋 ディスカッションするためには言葉ができればなりません。国際教養大学は入学すると、まずTOEFLの点数で能力別にクラス分けをします。高校までアメリカにいた、あるいはホームステイを経験した、そういった学生は当然英語ができます。でも、その学生がアカデミック・リーディングや英作文ができるかといえば、そうとは限りません。もう一度英語教育の基礎を固めておく必要があります。

能力別にクラス分けをしないのは、日本の教育の大きな間違いの一つです。英語教育は一つのクラスで、英文学をみんなであらうと読んで訳しておしまい。これでは、コミュニケーションに必要な英語力が培われるはずがありません。

せん。能力別の英語教育を四ヵ月集中的にやりますと、BBCやCNNを聞くことができるようになります。このくらいにまで日本の英語教育を変えていかないと、日本人はいつまでも英語ができないというコンプレックスを引きずったままになります。

潮木 大学に入るまで英語、ひいては異文化に接するチャンスがない。でも、本当は大学から始めたのでは遅いですよね。中学校、高校あたりで、そういう場面を作らなければ。

CNNといえば、少し昔の話になりますが、名古屋大学で図書館長をやった時、まず実施したのが休日開館。国立大学で最初の例でした。さまざまな抵抗があり、組合からいぶん文句を言われました(笑)。次に図書館の一部屋にテレビを置き、CNNを常に流し続けました。聞きたい者はそこへ行って聞けというわけです。どのくらいの効果があったか正確にはわかりませんが、いつもそこでCNNを見てい

た中国人留学生は実際、かなりの英語力をつけて卒業していききました。大学は学生のために、環境を整えることが大事だとつくづく思いました。

中嶋 大学図書館の休日開館は先生がバイオニアでしたか。おかげさまで、うちの図書館は二四時間三六五日開館を実現しています。初めは各方面から難色を示され、県知事とも交渉しました。その時、僕は「コンビニエンスストアが二四時間開いているのに、大学でいちばん大事な図書館が開いていないのはおかしい」と言ったものです。学生は非常によく利用しています。先生もおっしゃる通りに、学生は環境を整えて、きちんとステップを刻んでやりさえすれば、良い方向に進んでくれるのです。

先ほどの英語集中課程の次は、基礎教育です。いわゆる教養教育が中心ですが、TOEFLを五〇〇点以上取れないと進むことができません。その意味で、ステップを刻みすぎとご批判を

受けることもあります。大学全体の目的がグローバルに通用する人材を作ることであり、リベラルアーツの大学を目指していますから、そこは妥協しません。四年間でストレートに卒業する学生は五〇%前後と、九〇%以上が当たり前の日本の他の大学では考えられない数字かもしれませんが、学生から不満を聞くことはありません。むしろ留学を終えてからすぐに就職活動などせず、落ち着いてレポートを書きたいといった学生が多いのです。ちなみにアメリカのハーヴァード大学などの卒業率も五〇%前後です。

グローバル化時代の競争原理

潮木 教養教育は、大学設置基準の大綱化によって見事に失われました。名古屋大学の教養課程も解体され、初めから専門を学ぶことになりました。中嶋 大綱化は日本の文教政策の大きな誤りでした。教養教育がなくなったと同時に、外国語教育もおおざなりに

どう考えても時代に逆行していて、日本の現状は僕の言葉で言うところ、まさに「知の鎖国」です。だいたい、日本への留学を希望する外国人学生に、わざわざ日本で試験を受けさせる。質問も日本語。我々がアメリカの大学に学生を送る時、受験のためにアメリカまで行かせたりしません。そういうところもいちいち遅れています。国際教養大学では大学院も書類審査だけ、そのかわり厳密にチェックしています。

もう一つ、日本の「知の鎖国」化を進めたのは、教育公務員特例法、いわゆる教特法です。これのおかげで、二〇〇四年に国公立大学が法人化されるまで、日本の大学では外国人が管理職につくことができませんでした。大学は知のコミュニティであって、すべてに開かれていなければならぬのに、日本人でなければならぬ。東京外語大は二六の言語を教えていましたから外国人は多くいましたが、彼らは文部大臣

が発令した正式の教員ではなく、外国人教師という特殊なカテゴリーに入れられていました。

潮木 明治時代の制度そのままですね。それでも、最近はずっと変わってきて、東大、京大のみならず、外国人教員も増えてきました。

ただ、逆のケースもあります。数年前、東大の知人が一人オクスフォードに引き抜かれました。話を聞いた時、東大のポストはそのままにして、東大に半年、オクスフォードに半年という勤務形態をとれないか、と彼に言いました。そういう勤務形態は海外ならいくらでもありますよね。私がシカゴ大学にいた時のユダヤ人の同僚も、シカゴ大学に半年、ヘブライ大学に半年という勤務形態でした。一人の教員が定期的に国境を越えて移動するだけでも、それにとってもったさまざまな情報が行き来する。我々教師は絶えず新しい体験やインパクトを持っていないと、ルーティンに陥ります。東大の彼には、

そういう役割を負ってほしかった。結果的には東大をやめざるをえず、残念ながら頭脳流出になってしまいました。中嶋 よその国では当たり前のことがなぜできないのか。

潮木 ちょうど私は東大の外部評価委員会のメンバーだったので、「優秀な教員が引き抜かれたようですが、この教授会はそれをどう見ますか？ 指をくわえて見ているだけですか？」と言ったのですが、反応がはかばかしくない。取られたら取り返すとか、もつという教員を引き抜くとか、なぜ考えないのか。グローバル化は教員の世界にも及んでいて、国際競争は引き抜き合戦でもある。引き抜かれそうになったら、引き止めるだけの条件を用意できなければ競争にならない。

残念ながら、国立大学には引き止めるだけのブツがない。でも、法人化にはそれを変える目的もあったはずですが、教員一律給与なんて不合理なことをいつまでしているのかと、残念でした。

までで自分の学力をあきらめてしまっています。また、高校生の勉強は、大学受験に関係のあるものだけに絞られていて、受験に関係のない科目の授業は寝ている。

中嶋 数年前に世界史の未履修問題がありました、その典型ですね。

潮木 先日、日本に留学したスウェーデン人学生が、なぜ日本の学生は授業中に寝ているのだろう、とテレビで言っていました。異様に映るでしょうね。最近までは、高校生は大学入試のために勉強しました。たとえ入試にある三教科だけでも、ところが、今は入試を経ずに大学に入る学生が増え、入試さえ勉強の動機にならなくなった。学生の生活時間を分析すると、テレビとゲームではほとんどがつぶれている。

中嶋 僕は日本は幼児教育から考え直すなければならぬと思いますよ。外国で子供を育てた経験がありますが、なぜ日本は情操教育に関心がないのか。音楽が情操教育として重要なことは誰

中嶋 その点、国際教養大学は初めから三年の任期制で、評価によって年俸も変わります。今年は特別の貢献をした教員には、年俸を三割上げました。

潮木 私も外国人教師を大学院に集めようとした経験がありますが、日本の方式では誰も食いついてきませんね。来てほしいという人が来てくれない。安すぎるだけでなく、頑張っても頑張らなくても同じだから、魅力がない。中嶋 年功序列で、終身雇用はいいけれども、ほとんど競争原理が働かない。潮木 給与と評価について抜本的に考え直さないまま、良い外国人教師が来てくれないとぼやいていても始まりませんね。

中嶋 日本は今これだけの円高ですから、外国の人は日本に来たいはずですが、実際、国際教養大学で一つ募集をかければ、何十倍もの倍率になる。もちろん、会議もすべて英語ですから、僕にも辛いところはある。でも、そういうコミュニティがあれば、外国人教員だ

でもわかるはずなのに、受験に関係ないものだから、音楽の先生まで肩身が狭いのが日本の社会です。

潮木 教師の役割は、教えることは勿論、何かに対して、なぜそうなのというのかという好奇心を刺激することだと思う。好奇心をうまく刺激さえすれば、後は自分でやります。日本の学生はまだそこまで落ち込んでいません。

中嶋 僕もそう思います。

潮木 せめて大学の中では、すでに解決した問題について話すのではなく、ここがまだ未解決だ、これをどうしたらよいか、ということを学生みんなで考えていくようにしなければ。

中嶋 我々の大学は最終的にはクリティカル・シンキングの習得を目指しています。同時に、ただ英語ができて、国際社会を漂う浮き草になったのでは困るので、日本人としてのアイデンティティを大切にしています。新渡戸稲造の『武士道』を全学の必読文献にしているのはそのためです。今年の大学

って来やすいはずですが。日本の大学は、開こうと思えば開くことができる状況にある。それなのに、一人外国人が来ると、誰か一人やめなきゃいけないからと、なかなか開かれない。

潮木 日本の大学は、外国人教員だけではなく、日本人教師の養成にも問題があります。いまだに講座制の中でがらんじがらめになって、知的冒険に足枷をはめている。本来、大学の教員ほど、仕事を変わろうと思えば変えられる商売はないはずですよ。この自由、特権を大いに使うべきだと思います。チャンスはあります。でも、それに気づいている教員がどれくらいいるのか。

中嶋 おっしゃる通りですね。

大学入試以前の学力

潮木 大学教育に世の中の関心が集まって、大学たたき引きも切りません。もちろん大学に問題があるのは、これまで話してきた通りです。でも、大学生を見ていると、大部分の学生は高校

祭で学生が、図書館でいちばん読まれている本のアンケートをとりました。

一位は『武士道』の英語版。二位が村上春樹の小説で、三位が矢内原忠雄さんが訳した『武士道』日本語版。学長として、実に嬉しかった。

日本の今後の行き方にも関わりますが、グローバル化にふさわしい人材をいかに育てるかということを忘れては、日本が目指すべきは知的成熟による国家であり、知識基盤社会です。たとえ

ば、今の中国の経済大国化、軍事大国化とは違う国のあり方が日本にはあるはずです。

潮木 そのためには、学生にも教員にももっと積極的に異文化体験を促したい。別の場所へ行つて初めて自分の姿が見えてくる。自分を知らなければ、相手を理解することはできない。相手を理解しなければ自分の立場を主張することもできないのです。